

---

# ドラゴンクエスト? ~紡がれし三つの刻(とき)~

乱

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ドラゴンクエスト？～紡がれし三つの刻～

### 【Zコード】

Z2139Y

### 【作者名】

乱

### 【あらすじ】

この物語は、メインキャラクターなどを他の作品のキャラクターに置き換えてています。

主人公役の横島は転生者でも無く、世界移動した訳でも無く、横島というキャラクターを借りて来た訳です。他のキャラクター達も同様です。

キャラクターに合わせたギャグなどはし�ょっちゅうに入る事がありますが話は基本的に原作に沿って進みます。

ちなみにサブタイトルの「三つの刻」と言つのはパパス・主人公・勇者の三世代と主人公の幼年期・青年期前半・青年期後半を掛け合わせたつもりです。

それぞれ、一話づつ完成してからうやしょうとしてたけど少しづつでもなるべく毎日更新したいなと思ってこういう形にしました。本作はTINAMIにも投稿しています。

## Level1 「帰郷・パパスとタタオ」 その1（前書き）

横島を主人公に置き換えたDQ?。

そしてビアンカやフローラなども他のキャラに置き換えてます。  
パパスなど死んじゅうキャラなどはそのままだけど。

## Level1 「帰郷・パパスとタダオ」その1

カツチコツチ、カツチコツチ、カツチコツチ、カツチコツチ、

カツチコツチ、カツチコツチ、カツチコツチ、カツチコツチ、

その広い部屋には時計の音と、その背中に紋章が刻まれた赤いマントを着けた男がうろついて歩き回る靴の音だけが響いていた。

「パパス王、お気持ちは分かりますが少し落ち着かれてお座りになつてはいかがですか？」

大臣であろう一人の男が歩き回っている男に語りかける。

「う、うむ。… そうだな」

パパス王と呼ばれた男はそう言つと玉座に座るが、しばらくすると立ち上がり再びうろついて歩き回り出す。

そうしていると階段の方から誰かが駆けて来る足音が聞こえて来た。

「パ、パパス様！！ お、お生まれになりました！！」

「何！？ 本当か、バークよ！？」

「はい！… 早く王妃様の所に」

「う、うむーー！」

そしてパパスはすぐさま階段を駆け上がりつて行く。

「で、パーク。それでお子は？パパス王のお子は？」  
「お喜び下さい大臣様。それはもう立派な……」

パパス王が息を切らせながら出産が終った部屋へと駆け付けると侍女が笑顔で待つていた。

「パパス様、おめでとうござります！本当に可愛い、玉の様な男の子ですよ」  
「そ、そつかーー！男の子かーー！」

ほぎやあ、ほぎやあ、ほぎやあ、ほぎやあ、

生まれたばかりの赤ん坊は元気に泣いていて、母親はそんな我が子を愛おしそうに見つめている。

其処に満面の笑みを浮かべたパパスが歩いて来た。

「良く頑張ってくれたな、マーサよ」

「あなた…」

「おお、こんなに元気に泣いて……、

早速だが、この子に名前を付けてやらないことな

「ええ、そうね」

パパスは顎に手をやつり、餘りながい名前を考へてこる。

「う～む、う～～む……、そうだ…… 良い名が浮かんだぞ。トン  
ヌラ、トンヌラヒトヒツのせどりだーー？」

「…………トンヌラ…」

「どうだ、良い名だろ？。ははははははははーーー！」

「まあ、ステキな名前！ こましきて、かしこうど……、でも私  
もこの子の名前を考えていたの。タダオとヒツのせどりかじり。」  
「へ、そうか……、あまりパツとしない名前だがお前が良いのなら  
良いこと思つた」

そしてパパスは我が子を抱き抱えるとその名を呼んだ。

「神から授かった我等の子よ、今田からお前の名はタダオだーー！」

「元気に育つてね、タダオ」

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、

タダオと名付けられた赤ん坊は一人の腕の中で元気に歓声を上げて  
いた。

やつて……

ザザーン、ザザーン、

波に満ちた船の中の一室で少年は団を覚ました。

「えへ、むこうむこう。父ちゃんおまよ

「おお、起きたかタダオよ。……どうした? 变な顔をして」「何や变な夢を見たんや。ワイがどつかのお城で生まれる夢なんや」「はつはつは、それはまた变な夢だな」

「やんでな、变なおっさんのがワイにトンヌウツアーティーとこでもなこ如前をせかようとするんや。……つい、どうしたかや父ちゃん?」

「ぐ、変なおっさん……、とこでもなこ如前……」「オーッ

パパスは四つん這いになつて何やら頃垂れていた。

「と、とつあえずこの船旅ももうじき終りだ。今之内に世話をになつた人達に挨拶をして来なさい」

「分かつた。ほな、行つて来るわ」

そう言つとタダオは元氣に部屋を飛び出して行つた。

そんな後ろ姿を見ながら…

「マーサよ、タダオもあんなに大きくなつたぞ。早くお前にも会わせてやりたいな。……しかしタダオの奴、あの話し方がすっかり定着してしまつたな。何が気に入つたんだか……」

旅の途中、しばらく滞在した村の独特の話し方だがタダオもようやく喋り出した所と言つ事もあって、あの話し方で言葉を覚えてしまつたのだった。

その格好は白い布の服の上に紫色のマント、頭には赤い布を覆い被せる様に巻いている。

## Level1 「帰郷・パパスとタダオ」その1（後書き）

（・・・）やはり子供時代の横島は関西弁の方が似合っているので無理やりだけど設定をねじ込みました。

ちなみにタダオが頭に巻いている赤い布は？の主人公を思い浮かべてくれると解りやすいです。

子供の頃はバンダナよりそういう感じがいいと思ったもので。

## Level1 「帰郷・パパスとタダオ」その2

「お早う、船長さん」

「おや、タダオくんじゃないか。お早う」

タダオが甲板に出ると船長は船縁から双眼鏡を使って海を監視していた。

「もうじきビスターの港に着く。もうしたらパパスさんやタダオくんともお別れだな、寂しくなるよ」

「そうやな、せっかく船のみんなとも仲良くなれたのに残念や」

寂しそうに俯くタダオの頭を船長は優しく撫でてやる。

「はつははは、人の縁と言つ物はさう容易く切れる物じゃない。何時かまた会えるさ」

「ん～、むつかしゅうつてよく分からんけどまた会えるんならその時が楽しみや」

「そうだな、大きく立派になつたタダオくんと再会できるのを楽しみにしてるよ。……ほら、ビスターの港が見えてきた。お父さんを呼んで来なさい」

「うん、分かった」

笑顔で頷くとタダオはパパスを呼ぶ為に駆けて行く。

「…………、大きくなつたタダオくんか。きっとその時にはタダオ様と呼ばなくてはならないんだろうな。ねえ、デュムパボス・エル・

ケル・グランバー「ア国王様」

そつと呟いたその言葉はタダオの耳には届く事無く波の音にかき消された。

「父ちゃん、港が見えて来たで」  
「ようやく着いたか、村に帰るのも2年ぶりだな。タダオはまだ小さかったから良く覚えていないだろ」「何となく覚えとるで」  
「どうか、ならば早く帰ろう。バークが待ってるぞ」  
「うん！」

桟橋の所に着くと船長達が誰かを出迎えをしている様だ。

「船長、誰か乗り込んでくるのか？」  
「ああ、パパスさん。この船の持ち主のフォーベシイ様ですよ」「どうか。ならば乗せてもらつたお礼と挨拶をしなければならんな」  
そして長い黒髪を靡かせながら一人の男が乗り込んで来た。

「フォーベシイ様、お待ちしておりました」

「ああ、出迎え御苦労さま船長。おや、その人達は？」

私の古い知り合いで船の護衛代わりに同船していただいた……

ハハスと申します。この度は貴方の船に乗せていただきて大変助

かじました

「いや～、船を譲つていただけたんならお互い様ですよ。有り難うござります」

そんな風に一人が握手をしていると紫色の長い髪の小さな女の子が船に乗り込もうとしていた。

「アーティストのアーティスト」

「おや、ネリネちゃんにはこの入口は高すぎたかな？」

ネリネと呼ばれた女の子が桟橋から船に乗り込もうと四苦八苦していると。

「え?  
ほれ

タダオはそんな女の子に手を差し伸べてやる。

「つかまつや」

「あ、は、はい、/、/、/」

女の子は赤くなりながらもその手を掴み、無事に船に乗り込んだ。

「タダ才の奴め……」

「ははは、ネリネちゃん。ちゃんとお礼を言つんだよ  
「は、はい。あ、ありがと…」「やります／＼／＼」

そんな時、もう一人の女の子が乗り込んで来た。

「ちよつとネリネ、それに其処の貪相な奴。さうかとビュッケ、お  
じさんも邪魔なワケ」

黒髪で色黒の女の子はそう言いながらズカズカと歩いて行くと部屋  
があるであろう廊の中に入つて行く。

「これヒミ、失礼じゃないか。すみません、礼儀のなつてない娘で」  
「いや、お氣になさらずに。さあタダオ、我等も行くとしよつ  
「分かつたで父ちゃん、行こか……ん?」

タダオはパパスの後を追つて船を降りようとしながらネリネはタダオ  
の手を掴んだまま離そとしなかつた。

「どうしたんや?」

「あ、あの……、お、おなまえ……。わたし、ネリネ／＼／＼

ネリネはたゞたゞしくも、タダオに名前を聞く。

「そうか、自己紹介がまだやつたな。ワイの名前はタダオや、よう  
しくなネリネちゃん」

「う、うん……。またね、タダオ…… もま…／＼／＼

そこまで言つとネリネは顔を真つ赤に染めて逃げる様に走り去つた。

「?/?/?父ちゃん、ネリネちゃんビュッケしたんや?」

「パパスさん……、貴方のお子様は……」

「言わないで下をこ……。（これで何本田の旗だ？）」

やはり此処でも彼は鈍感であつた。

「では世話をになつたな、船長。旅の無事を祈つてゐるぞ」

「ええ、パパスさん……、さんこそお元氣で。タダオくん、元氣でな。お父さんの様に立派で強い男になるんだぞ」

「うん、船長さんも元氣でな。バイバイや」

そして、桟橋と船を繋いでいた橋は下ろされ、船はゆっくりと離れて行く。

タダオが名残惜しそうに船を見送つているとその後ろ側にあるベンダの様な所からネリネが顔を出し、手を振つていた。

少し寂しそうな顔をしながら……。

「またなーー、ネリネちゃん～ん」

タダオもそんなネリネの姿が見えなくなるまで手を振り続けていた。



## Level11「帰郷・パパスとタダオ」その2（後書き）

ネリネとタダオの話をもつと書き足すべきだったかな？一応、ネリネの「田ぼれなんだけど…」まあ、ゲーム本編でもんな感じだったし。

でも、もう少し考えてみるかな？

（・・・）ちなみにアンディ役にはピートを用意しています（笑）。つまり、三人目の嫁候補は別の人でした。

## Level1 「帰郷・パパスとタタオ」その3（前書き）

とつあえず、今回で一話目が完成。……はつくしょん！

風邪をひきました。

「さて、行くとするか。今からなら夕暮れ時にはサンタローズに帰れるだろ?」

「うん、はよ行こ。父ちゃん」

ビスター港から飛び出したタダオはサンタローズへと続く道を元気に駆けだした。

『ピキ——ツ——』

「わっ!」

サンタローズへと続く街道を駆けているタダオに、草むらの中から魔物が道を塞ぐかのように飛び出してきた。

「な、何や、スライムか」

タダオの田の前には三匹のスライムが並んでいて、その内の一匹がタダオを睨みつけたかと思うと行き成り飛びかかって来る。

「なんのつー!」

各地を旅して来たタダオは今までモンスターとの戦闘経験があり、スライム辺りが相手ならそれほど恐れる相手では無かつた。

タダオは背中にショットていたひのきの棒を掴むと一気にスライムに向けて振り下ろした。

『ペギヤーーッ！』

タダオの一撃を受けたスライムは地面に落ちると弾け飛び、その場所には赤い宝石が残されていた。

魔王の邪悪な波動を受けたモンスター達はその影響を受けて魔力を結晶化させた宝石をその身に宿している。

倒されて命がぬきても宝石は消える事無くその場に残り、その宝石の価値はモンスターの強さに比例して強力なモンスターであればあるほどその純度を増し、より高額で取引される。

「うーーん、2Gついでにやな  
『ペギヤーーッ！』

宝石を日の光に翳しながら鑑定していると他のスライムを退治したパパスがやつて来てタダオの頭を撫でる。

「中々見事な一撃だつたな、これは将来が楽しみだ  
「へへへ、そやろ？ほい、父ちゃん」

少し照れながらもタダオは手に入れた宝石をパパスに渡そうとするが彼はそれに手をかざして止めた。

「それはお前がスライムを倒して手に入れた物だ。お前が持つていなさい」

「ええんか？」

「ああ、無駄遣いはするんじゃないぞ。それに……」

「それに？」

パパスは厳しさと優しさの入り混じった目でタダオを見つめ、頭を撫でながら言葉を続ける。

「その宝石はお前が奪つた命である事は忘れてはならん。たとえ相手がモンスターであろうともだ」

「……うん、モンスターだつて生きてるんやもんな

「分かつていればいいんだ」

宝石を袋にしまい込み、タダオとパパスは再び歩き出す。それからも何度も何度かモンスターの襲撃を受けるが左程大した相手でも無く、タダオも少し怪我をしたりしたがパパスのホイミによつて瞬く間に治療される。

『ピキ——ツ——』

そして何度も闘いの時、タダオは襲い掛かつて来たスライムをひのきの棒で撃退する。

『ピキヤツ——』

その攻撃は「会心の一撃」と言つべき威力だったが、不思議な事にスライムは何時もの様に弾け飛ぶ事無く、地面に転がり田を回していた。

「ピキヤ～～～ア……」

「あれ？ 父ちゃん、なんでコイツは宝石にならんのや？」

「こ、これは……、まさか」

タダオは不思議がり、パパスが呆然としているとスライムは徐に起き上がり、タダオを潤んだ目で見上げている。

「ピイ、ピイ」

「何やコイツ、何が言いたいんか？」

「……きつと、友達になりたいんだろ？」

「ともだち？ ワイはコイツをたおそうとしたんやで？」

「きつとタダオに倒された事で悪い心が無くなつたんだろ？」

そう言つて来るパパスからスライムに目を移すとタダオは笑いながら話しかける。

「じゃあ、ワイといつしょに来るか？」

「ピイーーー、ピッピィーーー」

スライムはそう誘つてくれたタダオに飛び付くと、喜びながら頭の

上に盛り甘える様に体を揺らしている。

「（やはりマーサの子供だな。タダオにも同じ力が宿っていたか）  
じゃあ名前を付けてやらねばな。トンヌ…」

「ピエールや…！　お前の名前はピエールやで。……父ちゃん、な  
にか言ったか？」

「いや……、何でもない…」

パパスはそう言いながら歩き出しがその背中には何処となく哀愁  
が漂っていた。

そんなパパスを見つめるピエールは安堵の表情をしていたとか。

そして空が茜色に染まり始めた夕暮れ時、二人と一緒に遂にサンタ  
ローズへと辿り着いたのだった。

＝冒険の書に記録します＝

《次回予告》

旅を終えてサンタローズに帰つて来たワイと父ぢやん。  
そこで昔、よく遊んでもらつてたレイコ姉ぢやんと再会した。  
でも、レイコ姉ぢやんの父ぢやんは病氣みたいなんや。  
レイコ姉ぢやんの父ぢやんの薬を作る為に薬師のおひぢやんを捜し  
て洞窟を探検や。

次回「eve12「洞窟の中には」

わあ、ドリクHするで…

## Level11 「帰郷・パパスとタダオ」その3（後書き）

と、言う訳でスタートした多重クロスキャラによるドラクエ？ストーリー。

何故、タダオが主人公なのにパパス役がタイジュじゃないのか？それは物語の上でどうしてもパパスの死が免れない為です。

最初はギャグメインで行こうと思つてそれも有りかなと思つてたんですけどプロットを立て行くと結構シリアルな話になつて行つて、やはり死ぬ役に他のキャラクターを持つて来るのは不謹慎かなと言う事で原作通りに父親はパパスのままで行こうとした次第です。

仲間一号のスライムが「スラリン」じゃなく「ピール」なのはスライムからナイトへの進化フラグだつたりする。

敵モンスターの時は『』ですが、味方モンスターになつてからは「」と括弧を変えてます。

ピールの声は「メちゃん風と思つていただければ丁度いいかと。

そしてパパスさんは未だに諦め切れてない様です。

倒されたモンスターがGではなく宝石を落とすのはアニメドラクエの「アベル伝説」から持つて来た設定です。

ちなみに次回予告で解る様にイメージ曲は「夢を信じて」です。

絵が描ければイメージ画を描くんだけどな。

誰かいなかな～。

一・）チラリ

「取扱説明書」（前書き）

少しでも解りやすくなればと書いてみました。

## 「取扱説明書」

まずは、この物語の世界観から。

- ・原作にない村や町などが出でたりしますが基本的に何の世界。?の町や国が出て来る事は無い。

・主人公はタダオ。（GS美神・横島忠夫）本名タダリューオム・エル・ケル・グランバニア

ビアンカ役はレイコ（GS美神・美神令子）

フローラ役はネリネ（SHUFFLE！・ネリネ）

デボラ役はエミ（GS美神・小笠原エミ）

アンディ役はピート（GS美神・ピート）（オチは分かりますね）

サンチヨ役はバーク（Tick! Tick!・バーク）

その他、色々な作品からもキャラクターが出て来ますがそれが誰かは物語が進んだ先で。

・基本、話は元ゲーのドラクエ?に沿つて進みますが当然原作に無い展開もあります。

（タダオが無自覚の内にあちらこちらで旗を立てまくつているなど）

・パパス、マーサ、ダンカンなど、キャラクターを入れ替えていいキャラなども多数出て来ます。

パパス役を大樹にしようかとも思いましたが、ストーリー上どうしても死亡フラグは消せないのであえてパパスのままで。

モンスターを倒した時に得られるGについて。  
↑ゴールド

・最初は倒したモンスターを素材として売り払いGを得るという事

にしようかと思いましたがそれは既にやつて居るのでボツ。

・モンスターが冒険者や旅人を襲つた際に習性で光り物（G）を盗つていい、それを倒した際に再度手に入れるという方法もありますが、これも既にやつて居ると言つてこれもボツ。

・そこで思い出したのがアニメ版ドラクエ「アベル伝説」の宝石モンスター。

・魔王の魔力によつて凶暴化したモンスターの内部で魔力が結晶化、宝石になる。

その宝石がモンスターを倒した際にG<sup>ゴールド</sup>の代わりの報酬になる。

・つまり、タダオが仲間に出来るのは体内で魔王の魔力が結晶化していないモンスターと言つ事。

・タダオが倒す事によつてモンスターの体内の魔力は浄化されて結晶化、それが仲間になるモンスター。

・モンスターはドラクエ？には出て来ないモンスターや原作では仲間に出来ないけどこの話では仲間に出来るモンスターなどが出てきたりします。

その他の設定はまた後ほど。

「サンタローズ」

船旅を終え、街道を歩くパパスとタダオ、そしてタダオの肩に乗っているピエール。

そんな二人と一緒に目的地であるサンタローズの村が見えて来た。

「やつと帰つて来たんやな父ちゃん！」

「そうだな、タダオ」

村の入り口には見張りの村人が立つていて、一人を見つけると警戒するがそれがパパスだと気付くと満面の笑みで二人を迎える。

「パパスさん、パパスさんじやないですか！帰つて来たんですね！」

「おお、エーじゃないか、長い間留守にしたな。これから暫くはこの村に腰を落ち着けるつもりだ」

「それは皆が喜びますよ。……それはそうと、その子の肩に乗つてるのは…スライム！？」

門番のエーはタダオの肩の上のピエールを見るや否や、槍を向けようとするがパパスは笑みを浮かべながらそれを手で制す。

「心配は要らぬぞ。このスライムは邪氣を祓われている、もはや悪さはない」

「セツヤで、ペールはワイのともだちやーーー。」

「アーティスト」

「君は… タダオくんか。大きくなつたな、パパスさんやタダオくんが大丈夫と言うのなら心配はいらないな。じゃあパパスさんが帰つて来た事を皆に報告しなきや」

そう言つとヒーは村へと駆け出し、喜び勇んで村中にパパスが帰つて来た事を叫んで回つた。

「おお―――いつ――！　パパスさん達が帰つて來たぞ――――つ――！」

「お帰り、パパスさん」

「やあ、良き帰つて来たな！今夜は一杯飲みながら旅の話を聞かせてくれ

村人達は皆笑顔で一人を迎へ、家が見えて来ると玄関の前に召使いのバークが待つていた。

彼の服装は他の村人達とは違ひ黒を基調とした、いわゆる執事服である。

バークはタダオ達を見つけると勢いよく走りだした。

「た、ただいまや、バーク」

バークはタダオに駆け寄ると抱き抱え頬擦りをする。

一見するとかなり危ない光景ではあるが彼のパパスへの忠誠心は偽りなく、彼から寄せられる信頼度も高い為パパスもそれを笑いながら眺めている。

もしこれが、他の男であつたならすぐさま切り捨てられていたらう。

「はははは、大きくなられましたな」  
「うん。ワイ、大きくなつたやろ」  
「留守の間、苦労だつたな、バーク」  
「パパス様、このバーク、タダオ様とパパス様のお帰りを一日千秋の想いでお待ちしていました」  
「うむ、心配をかけて悪かつたな」  
「さあ、家中へ」

そしてパパスとタダオは懐かしの我が家へと入つて行つた。

「お久しぶりです、パパスおじ様」

そう言いながら一階から降りて来たのは栗色の髪を両側で結んだタダオよりも少し年上の女の子だった。

「おや、君は？」

「私の娘だよ」

「マミア、久しぶりだな。するとこの子はダンカンの娘のレイコか」「ああ、タダオも大きくなつたね。一年ぶりだから当たり前といえば当たり前だけどね」

「タダオ、私の事覚えてる？」

「えへへと。……あつ、レイコや！！」

「…2才年以上のお姉さんを呼び捨てにするのは珍しいの？」

そつ言いながらレイコはタダオの口を掴み、思いつきり両側に引っ張る。

「いひやい、いひやい、ほめんなはい、れひほおねへひゃん！！」

「解ればいいのよ」

「「「ははははは」」

大人達はそんな子供達を微笑ましそうに笑っていた。

「ねえ、タダオ。おじ様達は大人の話があるだろうから私達は一人で遊ばない？」

「うん、遊ぼ」

レイコとタダオはそう言いながら一階へと上がつて行つた。

「それでマミアよ、何の用事なのだ？私達が帰つて来る事を知つて

いた訳ではあるまいに」

「ああ、ウチのダンナが病気になつてね、薬を調合してもういに来たんだけど肝心の薬師のビーが洞窟に材料の薬草を取りに行つたまま戻つて来ないんだよ」

「う～～む、そうか。私もあの洞窟には用事がある。ついでと見ては不謹慎かもしれないが探してみよう」

「頼んだよパパスさん」

## Lesson 2 「洞窟の中では」その1（後書き）

（・・・）ルドマン役がフォーベシイなのにサンチョ役がバークなのは、ちょっと違和感。しかし、闘う召使い（執事）を誰にするかと悩んでいるとあの雄叫びが脳の中を駆け巡ったのです。『坊つちやーーーつーーー』と。

「ところでタダオ、そのスライムはどうしたの？」

「帰つてくる途中で友だちになつたんや、名前はピエール。ピエー

「魔物と友だちになるなんて、アンタはホントふしぎな子ね。まあいいわ、私はレイ」「よろしくねピエール」

- 17 -

笑いながらピエールの頭を撫でてやるとピエールは嬉しそうに鳴きながらレイコの手に頭を擦りつける。

「あいさつは終りやな。じゃあ、何して遊ぶ？レイコお姉ちゃん」「そうね、なら本を読んであげるわ。この本なんか良さそうね」

レイコは本棚から一冊取り出してペラペラとめくるとそのまま本棚に戻し絵本を取り出す。

「やつぱりタダオには絵本の方がいいわよね」「読めへんのなら素直にそう言えれば……」パコーンンッ――「良く聞こえなかつたけど何か言つたかしら?」「……何も言つてません……」

タダオは涙を滲ませ、叩かれた頭を擦りながらレイコと絵本を読んでいく。

ペールは何やら怯えてる様だ。

### 『ヤマグチ＝セマシ冒険隊』

冒険家、ヤマグチ＝セマシが世界中の洞窟や未開の地を冒険して回るところの話の絵本である。

レイコが机の上に絵本を広げて読み、タダオとペールはその横から覗き込んでいた。

「『まつくりやみだ、これはなにがおこるかわからないぞ』ヤマグチ＝セマシはいま、だれもはいつたことのないじつひこまこころうとしている」

「なあ、レイコお姉ちゃん」

「どうしたのよタダオ？」

「この絵なんやけど、誰も入った事の無い洞窟やのに向で入つて来るカワグチを洞窟の“内側”から描こうやんや？」

「……さあ……、続きを読むわよ。どうくつこまこいつたカワグチのあしもとにほひとのあたまのほねが……」

「えらいピカピカできれいな骨や……」スパークーーーン――！――

レイコの「ひづき。

タダオに25のダメージ。

ペールは逃げ出した。

「……黙つて聞いてるひで事が出来ないの？」

「……カドは反則や……」

「ピキイ~~~~~」

「レイ」「ーー、やうそり宿に帰りますよ」

「はーい、ママ。じやあタダオ、またね」

「うん、レイ」「お姉ちゃん」

レイ」「達は宿へと戻り、タダオは一階へと下りて行く。

「さあ、坊っちゃん。今日はこのバークが腕によりをかけて御馳走を作りますからね」

「わーい、楽しみやーーー！」

その日の夕食は思った以上に豪勢で、タダオは久しぶりに腹一杯の食事に満足したようすですぐに眠りこんでしまった。

「ふああ~~~~~、おはよーわ」

翌日

「お早ハビリをります、坊つちやん。朝食の用意は出来ますよ」

「ああ、早く顔と手を洗つて来なセー」

「はーーい」

タダオがまだ食べている時、こち早く食事を済ませたパパスは立ち上がるとタダオに話しかける。

「タダオよ、私はこれから用事があるので出かけるが決して一人で村の外へは出ではいかんぞ」

「わかつたで、いつてらつしゃいや父ちゃん」

「ペッ、ペイーー」

昔の事を思い出し、暗い表情になつていたバークだが元気に駆け出すタダオを穏やかな顔で見送る。

「氣を付けて下さいね、危ない事はなさらない様に」  
「わかつとるつて!」

## Level 2 「洞窟の中に」その2（後書き）

（・・・）川口浩探検隊。幼い頃彼等は私のヒーローでした。本氣で信じていた純粋なあの頃にはもう戻れない。

村の中を歩くタダオだが、もう春も間近だといつのに肌寒さに震えていた。

「うー、寒い寒い。どうしたってこうんだろ? うね今年は?」

「皿も寒そりやな。早う春が来ればええのにな」

そして、宿屋に着くとタダオは一階に上がりレイコ達が泊っている部屋へと入つて行く。

「アーニ姫が、おまえがアーニ姫だよ！」

「おや、坊やはパパさん所のタダオ君だね」

「うん、レイ【姉ちゃんは?】

「折角遊びに来てくれて悪いんだけどね、レイコはまだ寝てるんだ

そういうながらベットで寝ているレイコを覗き込むが、マリヤは寝ているレイコの髪を優しく搔き分けながらタダオに呟つ。

「この子は病気の父親が心配でね、昨夜も中々寝付けなかつたみたいなんだよ」

「そつかー。『メンな、わるこ』と呟つてもひつたわ」

「ははは、いいんだよ。だからもつしコレイドを寝かしてやつてね」

「うふ。じゃあ、また後でな」

そう言ひながら部屋を出て、扉を閉めみつといつもアマヤの姿がタダオの耳に聞こえて来た。

「はあ～、パバスさんも同じだしね。誰か捜しに行つてくれたうねえ」

宿屋を出で、少し歩いた所でタダオは足を止める。ホールは不思議そうにタダオを見上げる。

「ペイ？」

「よつしゃーペール、ワイヤード薬師のおつちゃんをさがして行へんや。そつすればレコ姉ちやんをせおぼひやんもよろいふで」

「ペー、ペー、ペー」

そして、こや洞窟に乗り込むとするのだが流石に武器がひのきの棒では心許無い。

そこで武器屋で新しい武器を買おうとしたら店の親父は。

「ほへ、ビーの奴を捜しに行くのか。だつたら特別サービスだ、今あるGにひのきの棒を買い取つた分を足して銅の剣を売つてやる。それでもGは足りないんだけどな、坊やの勇気に免じてだからな。他の雖には内緒だぞ」

と、銅の剣を売つてくれた。

「あらがと、おっちゃん。がんばつてくれるでー。」

タダオはさすがに買つたばかりの銅の剣を腰布に挿し、喜び勇んで駆けて行つた。

「ははは、冒険ゴッコか。俺も小さい頃はよくやつたものだ」

何と言つ事でしょ。この男はタダオが本当に洞窟に入るとは思つてなかつた様です。

## （サンタローズの洞窟）

洞窟に入ると流石に薄暗くなつて来て、ピエールが一緒にとは言え不安に駆られて来る様だ。

なのでタダオは歌を歌いながら先に進む事にした。

歌うのはあの絵本が題材になつた歌で、あのツツコミ所満載の絵本は小さな子供には結構人気があり、そのツツコミ所をツツコミまくつたこの歌は子供達の間で流行つていた。

ガイドラインの問題で掲載できないのが残念だ。

「～～そそりぱちの次はどくいも……」

歌を歌つてゐるタダオの前の方から何やら物音が聞こえて来た。そして、暗闇の中から出て来たのはスライムとおおきづちの一匹だった。

「ピエール、あいては同じスライムやけどたたかえるか？」  
「ピィツー！ツッピィーーー！」

ピエールは任せろと言つ様に身構えている。

おおきづちは初めて見るモンスターだが、パパスからその特徴などは聞いているので驚く様な事は無かつた。

だが、ピエールとは違つその赤く濁つた瞳を見ると何処となく寂し

くなるタダオであった。

## Lesson 2 「洞窟の中に」 その3 (後書き)

(・・・) タダオが歌っているあの歌、小説版から持つて来たネタでしゅ。

「本當ならともだちになれるかも知れんのやけど、かかるて来るならワイもてかげんでけへんで」

『シ...・..アナシ...』

スライムはピエールに襲い掛かるがピエールはそのまま壁にぶち当たって弾け飛んだ。

「フガ——！」

「ほんのお——つ——！」

タダオの頭ほどの大きさの木づちを振り上げながら突進してくるおきづちにタダオは慌てる事無く振り下ろして来る木づちをかわし、銅の剣を振り抜いた。

『フギヤ――!』

おおきびゅせ悲鳴を上げながら真つ一つになり、地面に落ちると溶ける様に消えて行き、後に残ったのは宝石だけだった。

その宝石を拾い上げるタダオの所にピールがスライムの宝石を咥えてやって来た。

「いぶるひさんや、やピール」

「ピール」

ピールから宝石を受け取るとタダオはピールの頭を優しく撫でてやると、それが気持ちいいのか体を揺らしながら喜んでいる。

そしてタダオは手の中にある宝石を見つめると寂しそうに呟いた。

「ワイヤがっぽつた命か……」

「ピイ？」

「なんでもないんや」

宝石を袋の中にしまい込むとタダオは再び歩き出した。

そして次々と襲い掛かってくるモンスター達。

蝙蝠の様な姿をした「ドライ」、丸い体に何本ものとげを生やした「とげぼうず」、大きめの体で頭に鋭い角を生やした「いつかくウサギ」、突然足元の地面から攻撃して来る「せみもぐり」。

此処まで襲つて来たモンスターと共に通るのはその瞳が赤く濁つて  
いる事、思い返せばピエールが襲つて来た時は皿つきは鋭かつたも  
の、瞳は濁つて無かつたよつて思い出すタダオだった。

奥へと進み、地下に続く階段を下りると岩が崩れている所が見えた。  
近づいてみて見ると更に下の階に岩が落ちていてる様だ。

「あぶないなー。ワイらも気をつけんといかんな、ピエール」  
「ピエ、ピエ」

更に奥へと進み、何度目かの戦闘の際にピエールが傷を受けてしま  
つた。

「だ、だいじょうぶか、ピエール？」  
「ピ...ピイ〜〜

ピエールはタダオに心配をかけまいと平気そうな振りをするが、そ  
れがやせ我慢だと言つ事は誰が見ても分かる事であった。

「こんな時、父ちゃんやつたら“ホイミ”でピエールを治せるのこ  
……、あれ？」

タダオが“ホイミ”と口にした際、手から何か温かな力を感じ、自分の体の傷が癒えている事に気付いた。

それはパバスにホイミをかけてもらつた時と同じ暖かさだった。

「…ひょつとして……、 “ホイミ”」

「ピ?…ピイ〜〜〜」

ピエールに手をかざしてホイミと唱えると、タダオの手から光が零れてその光はピエールの体の傷を癒して行く。

「ホ、ホイミやー・ピエール、 ワイにもホイミが出来たでー！」  
「ピイー、ピイーーー」

カサリ

そうやつて喜んでいると、後ろの方から物音が聞こえて来た。  
神経が過敏になっているタダオはすぐに振り返り、銅の剣を構えながら叫んだ。

「モ、モンスターか！？ かかつて来るならかかつて来んかーいつ

！…  
「ピキーーイツ！…」

振り向いた先には一匹のスライムが居り、怯えながら叫んで来た。

「まつ、待つてよー。虜めないでよ、僕は悪いスライムじゃないよーーー！」

「ス、スライムがしゃべった？」

「ピイ？」

スライムが喋った事に驚くタダオだが、すぐに構えていた銅の剣を下ろすと鞄の中へと戻した。

スライムはその行動に驚きながらも少しづつタダオへと近づいて行く。

「僕の事、悪いスライムじゃないって信じてくれるの？」

「おう、お前の口はピエールみたいにキレイやからな。悪いモンスターならもつといやな色をしてるで」

「ピイ、ピイ」

タダオがスライムの問いに答えると、ピエールもまた「その通り」と言わんばかりに頷いている。

「へえーー、君の名前はピエールって言うのか

「ピィ、ピィピィ。ピィ～～？」

「うん、とてもいい名前だね。僕？僕の名前はね…」

「お前、ピエールと話せるんか？」

「そりや、僕もピエールも同じスライムだもん」

「あ、そういうやうやつたな。わはははは」

「ピィ～～…」

照れくさそうに頭を搔きながら笑うタダオをピエールは呆れた様に見つめ、スライムはそんな一人を不思議そうに眺めながら語りかける。

「君は人間なのに何でモンスターのピエールと仲良くしてるの？ピエールって名前も君が付けてくれたってピエールが言ってるし」

「何でって、ともだちと仲よしするのは当たり前やろ？」

「友だち……」

自分と同じスライムを当たり前の様に友だちと言つタダオをスライムは少し恥しそうに見つめる。

「ピィ、ピィピィ」

「そうだね、忘れていた。僕の名前はスラリン、よろしくねピエール。そして…」

スラリンは自己紹介をすると少し不安そうにタダオに目を向ける、すると。

「ワイか？ワイの名前はタダオや。仲よしそうな、スラリン」

「ピィツ、ピィ～～」

「あ……う、うんっ！」

暗い洞窟の中で一人ぼっちだったスラリン、人見知りで寂しがり屋だった彼に初めて友だちと言う光が射した瞬間だった。

～スラリンが仲間になつた～

## Levele 2 「洞窟の中に」 その4 (後書き)

（・・・）と、言ひ説で洞窟の中に居たあのスライムがスラリんとして仲間になりました。

Level 2 「洞窟の中は」 その5 (前書き)

——話題は今回で完成です。

洞窟の中ではスラリングが先頭になつて道を案内している。  
流石に洞窟の中を住処にしていただけはあつて魔物の少ない所を選んで進んでいる。

「ところでタダオ」

「ん、何やスラリン?」

「タダオはどうやってピエールを仲間にしたか覚えてる?」

「ん~、どうやつたかな? いつもはたおした後はじけ飛んでたんやけど、ピエールはすぐに起きあがつて来たんや。父ちゃんに聞いたらともだちになりたがつてゐつて言つからともだちになつたんや。な、ピエール」

「ピイ、ピイ」

「そうか、だつたらピエールは“染まりきつてなかつた”んだね」

「…そまりきる?」

「うん。襲つて来る魔物を倒した後、宝石が残るだろ?」

「……ああ…」

タダオはそう答えながら袋の中から宝石を取り出す。

「それは僕達の体の中にある魔力が魔王の悪い波動で魂」と結晶になつたものなんだ。魔王の波動に“染まりきつてしまえば”もう元のふつうの魔物には戻れないんだ。ピエールはまだ“染まりきる”前だつたから元の魔物に戻る事が出来たんだよ

「ノイズ」の問題とその対応

「」

(それでも本当ならこんなに仲良くなれる筈は無いんだけど)

そんな風に話をしながら進んでいると、地下に続く階段がありタダ  
才達は地下に降りると何処からかつめき声が聞こえて来たのでタダ  
才達はすぐに駆け寄つて行く。

其処に居たのは一人の男で上の階から落ちて来たであるが若に足を  
挟まれていた。

「ううう、だ、誰かう。誰か助け、」

۱۷۷

魔物 ものたぬき まねきねこ

「つああ～～、＼？」

近づいて来たピエールに慌てふためく薬師だが、続いて聞こえて来たタダオの声に幾分落ち着いた様だ。

「うー、子供? 何で子供がこんな所に?」「おひちゃんは薬師のおひちゃんか?」「あ、ああ、そうだが」「よかったです、さがしてたんだ。レイコ姉ちゃんの母ちゃんが薬が来るのをまつとるんや、はやく帰らひや」「そ、そつか。なりにの脚をじかしてくれないか、身動きが取れないと」「いんだ」

「わかつたで、ピホールとスラリン手伝ひてや  
「ピイツ」

「分かつたよ、タダオ」

タダオとピホール達は岩を力一杯に押して行くと、岩はよつよつと動き出し薬師のジーはよつよく解放された。

「そりか、君はパパスさんの息子のタダオくんか。しかしその魔物達は一体……」

「ピホールとスラリンはワイのともだちや。悪い魔物やないで」

「ピイ———

「友だち……、嬉しいな」

指の下から解放された薬師のジーはタダオのホイミで傷を癒してもらい、皆で話をしながら洞窟から出る為に歩いている。

歩いて行く先には光が射して来てよつよく洞窟から抜け出した。

「さて、早速ダンカンさんの薬を作らなくてはな。タダオくん、ありがとうな

「どういたしまして。はやく作ってやつてな  
「ああ、任せておきなさい」「

ビーは笑いながら親指を立て、仕事場へと走つて行った。

「さて、ワイらも帰る。スラリンのことも父ちゃんどバークに紹介  
しなきゃいかんしな」「  
「本当にいいのかな?」「

「ええにきまつとるやひ。ワイらはもう、ともだちなんやで

「ピイーー

「うん、ありがとうタダオ

そして、タダオ達も家へと帰つて行く。

翌日。

ビーが慌てず急いで正確に頑張った為、薬は明け方には完成し、マニヤとレイコはさつそく薬を持ってアルカパへと帰る事になった。

「女一人だけでは何かと危険だからな、私が護衛して行くとしよう。  
タダオよ、お前も来るか?」

「うん、 もちろんワゴンも行くで」

「ピイツ」

「僕はまだ外の人間が怖いから留守番してるよ」

ピエールはもちろん自分もついて行くと張り切り、スラリンはまだ外が怖いと留守番しようとする。  
そんな二人にパパスは。

「ピエールには悪いがお前も留守番だ」

「ピイーー？」

「なんでや、父ちゃん？」

「アルカパはこの村より幾分大きな町だからな。 そんな所にピエールを連れて行くと騒ぎになりかねん」

「ピエールは悪い魔物やないで！」

「それはよく分かっている。 だが、人は魔物というだけで怖がるのだ。 それにダンカンの家は宿屋だからな、悪い噂が立つと客が泊らなくなるやもしれん」

「ごめんね、タダオくん」

「ううん、いいんや。 というわけでピエールもるすばんや」

「ピイーー」

「坊っちゃん、パパス様、お気をつけて行つて来て下せー」

「ピイーー」

「氣をつけてね、タダオ」

パークにピホール、スラリンの見送りを受けてパパスとタダオ、そしてマミヤにレイコはアルカパへと歩いて行く。

「ところでタダオ？」  
「なんや、レイコ姉ちゃん」  
「その頭のタンゴブヂうしたの？」  
「……お尻ペンペンとゲンコツ、ビッちがいいかつて父ちゃんに言われたからな。……、さすがにもうこの年でお尻ペンペンはかんべんや」

＝冒険の書に記録します＝

《次回予告》

何とか薬師のおっちゃんを見つけて薬が出来上がったで。  
父ちゃんにゲンコツもるたけどな……。  
アルカパに帰るレイコ姉ちゃん達にワイもお伴でついて行つたんや。  
でも、そこで……アイツら何ちゅーことをするんや！

オバケ退治？やつたら一やないかい！！

次回「Level3「オバケ退治にレヌール城へ」

トイの呪いは…父ちゃんのゲンコツや…

## Levele2 「廻廊の中には」 その5 (後書き)

(・・・・) タダオのセリフでひらがな表記が多いのはまだ6才だからそれっぽさを出そうとしてるからです。

( ^ ^ ) さて、次回はいよいよアルカパへと舞台を移します。そして当然、あのイベントには彼女が登場します!! お楽しみに。

少し思う所があって、タイトル変更。

……やっぱり、「オバケクエスト」は無いだろ？。

注・レイコがレヌール城のオバケの事を説明している所に修正を加えました。

## Level 3 「オバケ退治にレヌール城へ」 その1

「アルカパ」

サンタローズから半日ほど歩いた所にアルカパの町はあった。元々、アルカパとサンタローズは「レヌール」という小国に属していたがレヌール王家は後継者を得る事が出来ずに断絶、王家は滅びレヌール城も今は廃城となり訪れる者は無いと言つ。

それにより、現在アルカパとサンタローズは大国「ラインハット」に併合されている。

Level 3 「オバケ退治にレヌール城へ」

「ただいまー、やつと帰つて来たわ」

レイコは元気に叫びながらアルカパの町の門を駆け抜け、門番をしている男はそんなレイコに笑顔で話しかける。

「お帰り、レイコちゃん。薬は手に入つたかい？」  
「ええ、これでパパもすぐに元気になるわ」  
「それは良かった。さあ、早く薬を持って行つておあげ」

「うん、じゃーねー」

レイコは家でもあるこの町一番の宿屋へと駆けて行き、マミヤとバスにタダオも漸くアルカパに辿り着いた。

「全く、レイコつたら。少し急ぎ過ぎよ」

「はははは、いいじゃないか。それだけダンカンの事が心配だったんだろ?」「うう」

「お帰り、マミヤさん。それにアンタは…バスさんじゃないか。久しぶりだな」

「ああ、久しぶりだな。シーよ」

「父ちやーーん、早<sup>は</sup>うじてや」

何時の間にか先に進んでいたタダオが飛び跳ねながらバスを急かしている。

そんなタダオにバスは微笑ましそうに笑いながら答えてやる。

「分かった分かった、そう急かすな。ではな、シー」

門番をしているシーに挨拶を済ませるとバスとタダオはマミヤに連れられて宿屋へと入つて行き、ダンカンが寝ている寝室に案内される。

「ダンカン、久しいな。具合はどうだ？」

「おお、パパスじゃないか。何時帰つて来たんだ?『ゴホゴホッ』

「起きずともよい。マミヤ、早くダンカンに薬を」

「ありがとうパパスさん。さあアンタ、薬だよ」

ダンカンは薬を飲ませてもひりひり樂になつたのか、顔色も若干良くなつて來た。

「もう大丈夫だらう。タダオ、私達は少し話があるからお前は町でも歩いて来なさい。レイコちゃん、タダオの案内をたのめるかい?」

「ええ、任せておじ様。行こひ、タダオ」

「うん。たのむでレイコ姉ちゃん」

そうして一人は町へと出かけて行く。

バスと一緒にいろんな所を渡り歩いて來たタダオだが、立ち寄るのは小さな村や町ばかりであつた為、アルカバはタダオには初めての大きな町であった。

レイコと一緒に色々な店などを覗いたりしていると何処からか小さな悲鳴みたいな声が聞こえて來たので、その声の方に向かつてみると、池の中にある小島で、一人の子供が小さな動物を苛めていた。

「ほりほり、もつとちゃんと鳴いてみろよ」

『キュー』……、『くーん』

「違うだろ、猫ならニャーンて鳴かなきやダメだろ」

『ギャンツー』、『くーん』……』

小さな動物は怪我をしているのか抵抗も出来ずに蹲り、力無く呻き声を上げているが、それでも子供達は構わずに面白がって苛め続けている。

「アイシング……、なんちゅ一事をしつねんぢゃ……。」

「あいつ達は近所でも有名な悪がキよ」

「弱しものいしめにやめんかし」

「何だよお前は。コイツは俺達が見つけたんだ、どうしようど俺達の勝手だろ」

がへん

タダオはすぐさま駆け出して苛めを止めをやめようとするが子供達は耳を貸さず苛めを続けようとしていた。

たが、外の街から歩いて来る、この姿を見ると、たんにオロオロとしだした。

「鳴き声が何だつて？」

「げえ――つ――！」 レ、レイ！」

「乙女に向かって、けえ――!!」とほほよ――!!

「ばびうこあつーー！」

レイコの拳から繰り出される、星屑で革命<sup>けん</sup>な拳を受け、いじめつ

子兄は吹き飛んだ後、頭から地面に叩き付けられた。

「さあ、その猫さん放してやるんや」

「嫌だね」

「どうしても嫌なの？」

「ぐつ……、い……嫌だ……」

いじめつ子兄弟は猫？を放せというタダオとレイコにあくまでも嫌だと言つて譲らない。

正直、レイコが怖い事は怖いのだが男としての最後の意地が勝つている様だ。

彼等の足元には木に紐で繋がれた猫？が辛そうに蹲つてゐる。

猫？と表記してゐるのはその動物の尻尾が九本に分かれているからだ。この動物…否、この魔物の名は「キラーフォックス」それも、最も獰猛で知られる「キラーフォックス・ナイン」である。

本来なら大人達がそんな恐ろしい魔物を町に入れる事を許す筈もなかつたのだが本来「キラーフォックス」はこの地方と言うよりこの大陸には住んでいない魔物なので大人達もそれと氣づかずについたら

しき。

「じゃあ、じゅせつたら放してくれるんや」

「そりだな……、じゃあ噂のレスール城のオバケを倒したらこの猫はお前達にやるよ」

「レスール城のオバケ？ それって何や、レイコ姉ちゃん」

「此処から少し離れた所にある古いお城で、もうずっと昔から誰も居ない筈なのに夜になるとお城から灯りが漏れ出して氣味の悪い笑い声なんかが聞こえて来るよ」

「そ、そつか……とにかく、そのオバケを倒して来たら猫さんはワイらがもらうで」

「よし、約束だ。オバケ退治が出来たらこの猫はお前達の物だ」

「決まりね！ タダオ、さつそく今夜出かけるわよ」

「おうー！ と、その前……『ホイ!!』」

タダオは辛そうにしているキラーフォックスに近づくと回復呪文を唱えてその体に付けられた傷を癒して行く。

「キコウ？ ……『ヘン』

「もうちょっとのしんぼうやで。すぐに助けに来てやるからな

「ハン…ハン、ハン」

キラーフォックスはタダオの言つ事が分かったのか、しきりに頷きながらその尻尾をパタパタと振っていた。

「タダオ、あんた魔法が使えたのね」

「まだホイミだけやけどな」

「とにかく、オバケ退治がすんだりその猫は私達の物になるんだからね。もし、また苛めて傷が増えてたらタダじや済まらないわよ」

「わ、分つたよ」

「じゃあタダオ行くわよ。ちゃんと準備しておかなきや」

「了解や」

## Level 3 「オバケ退治にレヌール城へ」 その1（後書き）

（・・・）と、言ひ説でタマモ登場、それによりキラー・パンサーからキラーフォックスへと変えさせて頂きました。

## Level 3 「オバケ退治にレヌール城へ」 その2

それからタダオとレイコは武器屋へと行き、戦力の強化を計った。タダオは新たにブーメランを、レイコには茨の鞭を買い、防具も革の鎧に革のドレスを購入。

それらはばれない様に宿屋の裏に置いてある樽の中に隠しておいた。準備は万端、後は夜になるのを待つだけなので体力を温存する為にゆっくり休んでおこうと宿屋の中に入るとパパスは帰る準備をしていた。

「戻ったか、タダオ。ダンカンの見舞いも済んだ事だしサンタロー  
ズに帰るぞ」

「え……ちょ、ちょっと待つてや父ちゃん」

「ん? どうしたタダオ」

「今から帰るんか?」

「ああ、今からなら夜になる前に帰り着けるだらうからな」

「そ、そんな……猫さんが……」

「タダオ……」

今帰つたらレヌール城のオバケ退治は出来ず、猫を助けるという約束が果たせない。二人共、どうしようかと悩んでいるとそこに助けの声が聞こえて来た。

「ちょっとパパさん。 そんなに急いで帰る事もないだろう、一日位泊つて行きなよ」  
「そ、 そうよおじ様！ 私ももう少しタダオと遊びたいわ」  
「ワイもレイ「姉ちゃんともう少し一緒にいたいで！」  
「そ、 そつか。 ならば少し甘えさせてもらうとするか」「わーーい。（何とかたすかつたな、レイコねえちゃん）」  
「今日は一緒に寝ましうね、タダオ。（危ない所だつたわ。ママには感謝ね）」

両手を繋ぎ、飛び跳ねながら喜ぶ一人をパパスとマミヤは微笑ましそうに見つめている。

まあ、傍から見ると仲の良い二人が一緒に居られる事を喜び合っている様にしか見えないのだから。

だからこそ……

「これで家の宿屋も将来は安泰だね。タダオ君なら良い婿になれるよ、ねえバスさん」  
「マミヤはそんな風にタダオの事を狙っていたのか……」  
「あら、当たり前じゃないか。ほほほほほほほ

幸か不幸か、そんな大人達の会話は子供達の耳には届かなかつた。

そして、大人達も眠りについた深夜、レイコは隣に寝ているタダオを起こし家から抜け出して行く。

念の為、パパスが寝ている所も覗いて見たがぐつすりとよく寝ていた。

それでも「マーサよ、私達のタダオは真直ぐに成長しているぞ」と、寝言を言つた時には黙つて行く事に罪悪感もあつたが猫を助ける為だと自分達に言い聞かし、隠してあつた武器と防具を身に付けてレヌール城へと歩き出した。

「見えて来たわ、あれがレヌール城よ」

「うつわ～。うすきみ悪い城やなあ」

タダオとレイコの視線の先に佇むのは、嘗ては壯觀な白亜の宮殿で在つたであるレヌール城。

しかし現在はその外見に当時の面影を残すのみで、暗雲に包まれ時折雷鳴が轟く怪しげな城と化していた。

「さあ、今更逃げるだなんて言う選択肢は無いからね。覚悟を決めなさい」

「元、逃げるつもりなんてないけど、でも悪い事には変わつてないく  
んで」

「グダグダ言わない。いやついやつと進みなさい」「へへへい

そして二人は城の正門から入ろうとするが、巨大な上要所要所が錆びついているらしくその扉は開かない。

何処か他に入る場所が無いかと探し回る内に、城の裏側に上へと登れる鉄梯子を見つけた。

「とりあえず、入れそうな場所は此処しか無い様ね」  
「やな。じゃあ、レディーファーストでレイ…バゴムッ………」  
「が先に登らせていただきます。いてて…」

レイコに拳骨を受けた頭を擦りながらタダオは梯子を登つて行き、レイコもその後に続く。

登り終えた先にはアーチ状の門らしき場所、その先には城の中へと招き入れる様に扉が開いていた。

「あそこから入れるわね、行くわよタダオ」「なんか、嫌なよかんがするんやけどな」

周りを警戒しながら進み、扉から城の中に入ろうとした瞬間、突如門らしき場所のアーチ状の部分から鉄格子が降りて来て二人は閉じ込められてしまった。

「…嫌なよかんはしどつたんや」

「い、今更言つても仕方ないでしょ。」うなつたら先に進むしかないわ」

「せやな。城の中からならほかに出口があるかもしれん。オバケを倒してからさがそつな」

「その意氣よ」

半開きの扉を開いて中に入るときには幾つかの棺桶が並び、おどろおどろしい雰囲気の中、二人は身を寄せ合いながら進んで行く。

そして目の前に下の階に降りる階段が見えて来た時、タダオはすぐ隣に居た筈のレイコの気配が消えている事に気が付いた。

「あ、あれ？レ、レイコ姉ちゃん？どこや？い、いたずらは無しやで……。ひょっとしてオバケにさらわれたんか？！」

レイコが傍に居ない＝オバケに攫われた。

この図式が頭を過ぎた時、タダオはさつきまでの怯えは消え去り、レイコを探し出す為に全力で駆け出し、階段を駆け下りて行く。

下の階に降りると石像が並ぶ先に明かりが漏れて来る扉を見つけ、再び駆け出す。

すると石像の中の一體が突如動き出し、タダオの行く手を遮る様に通路を塞いだ。

「じゅまやーーーっ！… どかんかーーーいつーー！」

### タダオの攻撃

### 会心の一撃

動く石像をやつつけた。

レイコを心配するが故での火事場の馬鹿力か、強敵である筈の動く石像を一撃で倒した上、それに気付かずにいるタダオだった。

扉を開くと、其処は城の屋上の一角で庭園みたいな場所に墓が二つあつた。

タダオはその墓に近づいてみると墓石には「タダオのはか」と書かれており、もう一つの墓石を見ると「レイコのはか」と書かれていた。

「「レイコのはか」って……、たいへんやーーーっ… レ、レイコ  
姉ちゃんーんーー！」

タダオは大慌てで墓石を力一杯に押すと墓石はゆっくりとずれて行き、中からレイコが出て来た。

「レイコ姉ちゃん、ぶじやつたんやな。良かった——！」

安心したタダオは泣きながらレイコに抱き付いたが、レイコは何も言わずにその手をそつと離せるとゆつくりと立ち上がる。

「レ、レイ」「姉ちやん？」

その体から湧きあがる怪しげな雰囲気に少し怯えながらもタダオはレイコの名を呼んでみた。

レイコの笑い声はその黒いオーラと共に激しさを増し、そして.....

「私を墓の中に押し込むなんていい度胸してゐるじゃない、あんの腐  
れ悪靈共！……」この美神令子が極楽に逝かしてやるわッ！  
！」

遂にレイコの怒りは限界を超えた。

「美神つて誰や――――つ！？」

ついでにタダオの恐怖も頂点に達した。

＝冒険の書に記録します＝

『次回予告』

猫さんを助ける為にオバケ退治にやつて来たレヌール城。  
でも此処には猫さんよりもっと困つてゐる人達が居たんや。  
待つてな王様たち、ワイらが絶対に助けたるからな。  
そうや、猫さんも王様たちも、ワイとレイコ姉ちゃんが助けるんや。

……でもな、もう一度聞くでレイコ姉ちゃん。

次回 Level 4 「GSレイコ 極楽大作戦！」

美神つて誰や――つ！？

## Level3「オバケ退治にレヌール城へ」その2（後書き）

（・・・）ありのまま、全てを告白します。美神をビアンカ役にしたのはこのネタをやりたかったからです。でもまあ、それ程ハズレ役つて訳でも無いと思うんですよ、美神もあれで結構面倒見はいい方ですし。とにかく此処の美神<sup>レイコ</sup>は素直になつた美神つて事で。……次のタイトルもあくまでもネタで主役はタダオです……の筈。

レイ「」を助け出した後、タダオ達は再び城の中へと進んで行く。下の階に降りると其処は嘗ては図書室だったのか、本棚が乱立し、その内幾つかの本棚は倒れ伏している部屋だった。

「……もうみんなボロボロで読めないわね」  
「そうやな、もつたいないわ……。あれ？」  
「どうしたの、タダオ？」  
「いや、だれかそこにおつたよつた気が」「  
もしかして、噂のオバケ？」

そう言い、少し怯えながら辺りを窺っていると淡い光に包まれた一人の女性の姿を見つけた。

「うわっ!」  
「あやっ!」

突然の事に驚いた二人だが、その女性の悲しそうな顔を見ると不思議と恐ろしさは感じなかつた。

女性は一人の顔を見つめた後、ゆっくりと歩き出し倒れていた本棚の中へと消えて行つた。

「レイ「姉ちゃん」

「ええ、あの本棚の下に何かありそうね」

Level 4 「GSレイコ極楽大作戦！」

「「よしよしよ、よしよしよ」」

二人は力を合わせて倒れていた本棚を押すとその下から隠れていた階段を見つけ、下の階へと降りて行く。

少し進んだ場所に立派な扉があるので中へと入ってみると其処には天蓋付きのベットがあり、此処が嘗ては王と王妃の寝室であつた事が分かる。

「ここは王様達の寝室だったのね」

「もうボロボロやけどふかふかで気持ちいいベットやつたんやろな

」

『そうです。王族としての激務が終わった後、此処で王である夫と過ごす時間は私達にとつて掛け替えのない穏やかな時でした』

二人が部屋の中を見回していると、何処からともなく女性の声が聞こえて来て、その方向に目を向けるとソファーにひざきの女性が座っていた。

「あ、貴女はひょっとして……お、王妃様ですか？」

『はい、私がレヌール王妃、アリナです』

「ちゅーことは、王妃さまがうわさのオバケなんか？」

「そんな訳ないでしょ！…』

「ふぎゃんっ！…』

レイコに拳骨を受けたタダオが頭を擦つているとアリナはゆっくりと語り出す。

『私とあの人との間には何時まで経っても子供が出来ませんでした。そして、何時しか私は何処からか流れて来た謎の病に倒れ、そのまま命付きました。それから後、の人もまた同じ病にかかり死んでしまわれました。この城に近くしてくれた家臣たちも同様に。その為、レヌール王家は途絶えこの地は隣国ラインハットに併合される事となりました』

「そうだったんですね…』

「王妃さまたち、かわいそうやな。ぐすん』

レイコとタダオはそんなアリナの話を聞きながらもその悲劇に涙を零していた。

『あなた達は優しい子供ですね、その綺麗な涙で私の悲しみも少しは癒されます。私達にもあなた達の様な子供がいれば……』  
「でも、王妃様達は何故幽霊のままさまよつてゐるの?」

レイコは疑問を聞いてみた。

アリナは目を瞑りながら顔を伏せ、少し考えてみたのか徐に顔を上げながらレイコ達に答える。

『私達の体はこの城に葬られ、安らかな眠りの中に居ました。しかし、ある日突然その眠りは遮られました。何者ががこの城を牛耳り、私達の魂を呼び起したのです。その日から私の魂はこの城を彷徨い続け、同じ様に彷徨つてゐるであらう王の魂とはその何者かの邪魔によつてすれ違ひ続けているのです』

「酷い……」

「安心してや、ワイらはそのオバケを退治しに来たんや。王妃さま達も助けてやるからな……」

「そうね、タダオと私でそんな奴コテンパンにしてやるわ」

「えいえいお——!」

アリナのそんな二人を見つめる瞳には涙が浮かんでいた。

『ありがとうございます。あなた達は本当に勇氣がある子供ですね。あなた達に神の御加護がありますよ!』

そつとつて送り出してくれたアリナを残して二人は再び城の中を捜し始めたが、その間も廃墟になつた城に住み着いた魔物達が襲つて来る。

大蛇の骨が邪悪な波動を受け、仮初の命で動き続ける「スカルサーメント」

まるで蛇の様に怪しげな炎の様な幽体の「ナイトウイープス」長い舌を持つ見た目その物の「ゴースト」

捨て置かれた蠟燭に邪靈が取り憑いた「おばけキャンドル」

次々と襲い掛かつてくる魔物達だが、幼いながらも幾度もの実戦でレベルアップを重ねているタダオ、そんな彼に負けじと闘うレイコの前に魔物達も倒されて行つた。

歩き続ける一人の前にアリナの時の様な淡い光の中に一人の男性の姿が浮かび上がつて来た。

立派な服装に頭に乗つている王冠から、彼が王妃のアリナが言つていた王様だと言う事が見てとれる。

「すみません、あなたが王様ですか？」

『ん？ おお、これは可愛らしいお客様達だ。……それにしても私の様な幽靈を目の前にして怖くないのかい？』

「全然、ねえタダオ」

「うん、王妃さまと同じや。ぜんぜん怖くないで」

『な、なんと、お前達は王妃に…アリナに会つたのかい？』

「ええ、王様の事も心配してたわ」

王妃の靈とも出会い、同じ様に彷徨つている事を伝えるとレヌール王は悲しい顔をして涙ぐんでいた。

「安心しても王さま、ワイとレイコ姉ちゃんが悪いオバケをおして王をまたちを助けたるから。王妃さまともそう約束したんや」「そりよ、大船に乗つた氣持ちで任せておいて！！」  
『あ、ありがとう、勇気ある子供達よ。お礼と言つては何だが君達の現在のレベル調べてあげよつ』

レヌール王はそう言つとタダオとレイコの頭の上に手をやり、何か呪文の様な言葉を呴くとその手に灯つた光が一人の体を包んだ。

『ふむ、坊やのレベルは年齢からみても結構高いな』  
「王さまは神父さまやないのにそんな事がわかるんか？」  
「こら！ 分かるんですかでしきう」  
『はつはつはつ、構わぬよ。儂も神父達と同様に精靈の声を聞く修行はしてあるから、王座に着く者の嗜みと言つ物じやよ。坊やのレベルなら“バギ”が使えるだろつ』  
「バギ？ バギってあの手から風がビューンって飛んでいくヤツか？」  
やつた——』

レヌール王に調べてもらい、“バギ”が使えると知つたタダオは喜んで走り回るが、そんなタダオを見て面白くないのがレイコである。

「王様、私は？私は何も呪文は使えないんですか？」

『落ち付きなさい、君もレベルアップしているからね。君は“メラ”と“マヌーサ”が使える様だ』

「メラとマヌーサ？」

『メラは炎を飛ばす呪文、マヌーサは霧の中に幻覚を見せる呪文だ』  
「炎を飛ばす？……いいわね、ソレ。今の私に丁度いい呪文だわ」

レイコははちよつと危ない眼をして「くつくつくつ」と囁く。  
そんなレイコを見てレヌール王は後頭部に大きめの汗を流し、タダオは涙目で怯え、王の体にしがみ付いていた。

『あ、あの娘は何かあつたのかね？』

『オバケにさらわれて、お墓の中ごじごじめられたんや』

『な、なるほどな…』

『さあ、タダオ。先を急ぐわよ』

「ラジヤりました！-！」

先を急ぐと言つレイコの言葉にタダオはテンパつていたのか、良く分からぬ返事を返す。

振り返つたレイコの目が一瞬赤く光つてた様に見えたのだから仕方ないであろう。

## Level 4 「GSレイ」「極楽大作戦！」－その1（後書き）

（・・・）「」でまた設定変更、レヌール王が魔物退治を依頼するのではなくタダオ達が自分達から率先して退治に行きます。呪文習得も王の助言で使えるようになりました。

「じゃあ王様、少し待つていてね。すぐにオバケ達を倒して王様も王妃様も助けてあげるから」

「ワイもがんばるで！！」

『すまないな子供達よ、私も力になりたいのだが命無きこの体では何も出来ぬ』

すまなそうに首を垂れるレヌール王に「気しないで」と笑いながら答え、レイコとタダオは城の中を進んで行く。

その間も襲い掛かってくる魔物達を撃退しながら先を進むと今迄で一番立派な扉を見つけた。・

扉を開き、中に入ると玉座に緑色にくすんだフードを被った何者が座っていた。

その者から感じる気配は今までの魔物とは明らかに違い、レイコとタダオはこいつが王と王妃を苦しめている元凶だと直ぐに察した。

### 『親分ゴースト』

ゴーストとはいってもこの男は魔物ではなく、れっきとした魔族である。

魔族、それはこの人間界とは別の次元にある魔界の住人でその保有する“暗黒魔力”を用いて魔物達を操る事が出来る。この城に住み着いている魔物達も親分ゴーストに操られているのであろう。

「アンタが王様達を苦しめている一番悪い奴ね！」

『ひひひひひ、だとしたらどうするね?』

「ハヤシがやつつかひやね。」

『おお、勇ましい勇者様だ。ところでお腹は空いてないかい?』

「お腹？」

言われてみれば一人は武器や防具は用意していたが、夜食になる食

べ物を用意しておく事にまでは頭が回らなかつた。

その間に製作した造形——「お腹」

『ひひひひひ、どうやら腹ペコの様だな。ならば食事に御招待す

卷之三

「阿か勘違ハしてゐる様だな。」食事になるのは、お前達だよ。

親分ゴーストはそう言い放つと、コンコンと足で床を鳴らすと二人の足元の床が抜け、そのまま下へと落ちて行った。

「どう――――う――。」

ベチャッ！！

「な、何や？変にベチャベチャする所に落ちた……くつせ～～！…」「何よこれ！？お肉に魚に野菜、みんな腐つてゐるじゃない！…」

魔物は大抵が雑食であり、何でも食べる。  
だが邪悪な意思に目覚め、知恵を付けた魔物は何故か腐つた物を好んで食べる傾向がある。

『何だ？何か落ちて來たぞ』

『こりゃあ、何とも旨そうなガキ共じゃないか』

『へへへへ、丁度腐肉の汁がミックスされて味付けも完璧だな』

『さあ、お前達は踊れ踊れ！もつと俺様達を樂しませるんだ！』

『そんな、あんなに小さな子供達を食べるなんて…』

『嫌だ！これ以上お前達の為になんて踊りたくない！…』

『もういい加減、儂らを安らかな眠りに戻してくれえ』

食卓を囲む魔物の周りにはおそらくはこの城に仕えていたであろう者達の幽霊が強引に踊らされていた。

その皆が悲壮な表情をしており、若い女性や男性だけでは無く年老いた老人の幽霊もいて、涙を流しながらもその踊りは止まる事は無かつた。

『ひやははははははは！さて、お前達も美味しく頂いた後はここに等と一緒に踊りに加わってもらひたい』

魔物達は舌舐めずりをしながら一人にそつ囁つが、レイコとタダオは脅えるどころか逆にその田には怒りの炎が灯っていく。

「タダオ、行くわよ」

「うん。くさがつとる場合やないな。ワイもドタマに来たでーー。」

剣を振り回しながら近づいて来る「オバケキャンドル」や怪しい炎に包まれていて「ナイトウイップス」にタダオは渾身の勢いでブームランを投げ付ける。

数体はそのまま両断され、何とかかわした数体も腕や、体の一部を失つていて続けてタダオが唱えた“バギ”によつて切り裂かれていく。

「「ゴースト」や「スカルサーペント」はレイコに襲い掛かるが、レイコは覚えたての“マヌーサ”をさつそく唱えてみる。

霧に包まれた魔物達はその目も虚ろになり、同志討ちを始めた。レイコはそんな魔物達に“メラ”を放つと魔物達は炎に包まれ灰になつていく。

残つた魔物も既に息は絶え絶えで、茨の鞭の前に倒されていく。

『おお、やっと踊りが止まつた  
『体の自由が戻つて来たぞ!』

場の魔物達が一掃された為か、踊り続けさせられていた幽靈達はようやく体の自由を取り戻す事が出来た。

『ありがとう、坊やたち。助かつたよ』

『本当に苦しかつたの。ありがとう、ありがとう』

「安心するのはまだ早いわ。まだボスが残つてるからね」「あんなヒキョウモン、ワイとレイコ姉ちゃんとでイチコロや……」

心配しながら見送ってくれた幽靈達に手を振りながらタダオとレイコは先を進み、再び玉座の間に戻つて来た。  
親分ゴーストは戻つて来た二人を睨み付けるが恐れもせずに睨み返していく二人相手に正直怯えていた。

『ば、馬鹿め! お前達の様な子供が儂に勝てると思つていいの

か?』

「その子供相手にあんな姑息な罠を使ったのは誰よ?」

「言つとくけどワイらは怒つとんやからな、覚悟せえや……」

『身の程知らずめ、『ギラ』!』

「うわっ!」「きやあつ!」

先制攻撃は親分ゴースト、いきなり閃熱呪文を放つて来るがここまで闘つて来た魔物の中にも呪文を使って来た相手はいたのでそれほど慌てずにかわす事が出来た。

逆に親分ゴーストは先制攻撃をかわされた事で動搖し始めた。  
魔族は人間よりは強い体と魔力を持つてはいるが、親分ゴースト自身はそれほど強い訳では無かつた。

武器を持つても攻撃力は高くなく、呪文も強力な攻撃呪文は持つていなかつた。

つまり、親分ゴーストは生者が居ないこの城だからこそボス気取りの出来たいわゆる「張り子の虎」であつたのだ。

そんな彼の一番の武器でもあつた、ギラもあつさりとかわされ、今度はタダオ達が呪文攻撃をかけて來た。

「バギ」「メラ」

『ギヤああーーーーー!』

タダオのバギに引き裂かれ、レイコのメラに燃やされ、のた打ち回りながら服に燃え移った火を消す為に転げまわる。

そんなあまりにも無様すぎる親分ゴーストを見て、一人はただ呆然とするしかなかった。

「……あ、ありや？」

「何なのよコイツ。少し弱すぎるんじゃない？」

『ひいい／＼、助けてくれい。わ、儂が悪かった…勘弁してくれ、許してくれい／＼！』

親分ゴーストはひいひいと泣き、床に頭を擦り付けながら一人に許しを請うてくる。

二人は顔を見合せながらどうしたらしいのか分からなくなつて來た。

何しろ強敵との一大決戦を覚悟してやつて來たというのに、呪文を一発当てただけで泣き喚きながら謝つて來るのだから。

## 「Levele4 「GS」レイ「極楽大作戦!」」その2（後書き）

（・・・）サブタイトルは前話で言つたようにあくまでもネタで「レイ」「無双」と言つて訳ではありませんでした。続きは今日中にうつする予定です。

「と、とにかく！許してほしいのならまづ、王様達を苦しめている呪いを解きなさい！」

『は、はい！今直ぐに！』

親分ゴーストは両手を上に上げ、何やら聞き慣れない呪文を唱えると、城の中に漂っていた嫌な感じがゆっくりと薄れて行つた。

『これでこの城に浸透させていた儂の魔力は消えました。城の中に残っていた魔物達にも立ち去るよう命じておきましたからじきに元の静かな城に戻る筈です。しかし、これで許してもらえますね？』

親分ゴーストは相も変わらず土下座をしているが、そんな彼の前にタダオは立ち、睨みつけながら見降ろす。  
くすぶつていた怒りが再燃して来たらしい。

「まだ話は終わってへんで！何でこんな事をしたんや！！！」

「そうね、許すか許さないかはその事を聞いてからの話ね」

『はい！話します、話します。実は……』

そして彼は語り始めた。

彼は元々魔界の辺境で小さな集落を作り、魔物や若い魔族達と共に  
村長むらおさとして暮らしていた。

そんなある時、今までに無い強力な魔力を持つ大魔王「ミルドラー  
ス」が魔界全土を掌握した。魔物達や魔族達はその強力すぎる暗黒  
魔力の波動を受け、より強力な魔物や魔族へと変貌していった。

だが何故か自分だけは大魔王の影響を受けずにいた。

やがて、集落に住んでいた者達は大魔王に仕える為に村を離れて行  
く。行かないでくれと頼んでみても見下した目で冷ややかに見返し  
て来るだけで次々と去つて行く。

従えていた筈の魔物達も自分よりも強力な力を得て、逆に攻撃を仕  
掛けてくる始末だ。

同じ様に大魔王の元に行つたとしても下手をしたら魔王軍の一員で  
は無く魔物の一匹として扱われるかもしない。

彼なりの小さな誇りがそれを許さなかつた。

完全に行き場を失つた彼は未だ大魔王の影響下に無い人間界に逃げ  
る事にし、旅の果てに辿り着いたのが此処レヌール城だった。

その後はタダオ達の知つてゐる通り、王様気取りで城に君臨してい  
た訳だ。

「……隨分とまあ、身勝手な話ね」

「いくら行く所なくなつたからつて、死んだ人苦しめてええわけあるかい！…」

『ひいいつー「ゴメンなさい、ゴメンなさい」…』

あまりの身勝手さにレイコとタダオが茨の鞭とブーメランを振り上げた時、扉の方から声が聞こえて来た。

『小さな勇者達、もう其処までにしてあげなさい』

『それ以上は退治では無く虐めじや』

その声に一人が振り向いてみると、其処にはレヌール王と王妃が立っていた。

「王様に王妃様、何で止めるの？」

「せやで、コイツのせいで王さまたちは苦しんだんやないんか！…」

怒りが治まらないといった感じの一人に王と王妃はゆっくりと近づいて行き、王はレイコの、王妃はタダオの頭を其々優しげに撫ると二人の怒りも徐々に落ち着いていく。

「王様？」

『儂等の為に怒ってくれるのは嬉しいし、正直儂等も此の者の行いは許し難い。だが小さな勇者達よ、それでも「許す」という強さ

は必要だと儂は思うのじゃ』

『此の者が誤つてしまつたのは力と心が弱かつたから。此の者をこのまま倒すのは「力」の強さ、しかし私達はあなた達に此の者を許すと言う「心」の強さを持つてほしいのです。その強さはいざれあなた達が大人になつた時に正しい道を示してくれるでしょう』

レヌール王と王妃がタダオ達に語りかける言葉を聞きながら、親分ゴーストはその瞳から涙を零していた。  
こんなに大きな心を持つ二人に比べて自分は何と小さな存在だったのだろうと。

頭を下げ続けながら涙をボロボロと零す親分ゴーストを見ながら、タダオとレイコもその怒りを霧散させていった。

「もう、悪い事はしないわね？」  
「やくそくするんなら許したるで」  
『約束します！一度と悪い事は働きません、貴方達の心に答える為にも頑張つてやり直してみます！』  
「……そんなら仲直りや」

タダオはバツが悪そうにそつぽを向きながらも親分ゴーストに手を差し伸べる。

彼はその手を両手で包み込む様に握り締め、泣きながら何度も「ありがとう、ありがとう」と繰り返し、その体はタダオの手から零れて来る光の粒に包まれていた。

夜明けも間近に迫つて来て、親分ゴーストは精神修行の旅に出ると  
言い、城を立ち去ろうとしていた。

レヌール王と王妃は心を入れ替えたのならこの城に留まつて良いと  
言つたのだが彼は、

「いえ、ワシがこの城に留まつておると貴方様達はともかく、ワシ  
が苦しめていた臣下の方々が安らかに休めぬでしょう。それにワシ  
も世界を見て回りたいのです」

と言い、王やタダオ達も快く見送る事にした。

「おつと、そうじや。実は以前、この様な宝玉を見つけたのじゃが

彼は懐に手を入れて弄ると、手の平大の黄金色に輝く宝玉を取り出  
した。

「これは王様達の持ち物では無いですかの？」

『いや、我が城に伝わる物では無いな』

王と王妃もその宝玉を眺めて見るが心当たりのある物では無かつた。

「ふむ、ではどうするか……。そうじゃ、タダオ殿がもうつてはくれまいか?」

「ワイが?」

「うむ。ワシの様な者が持つておるよりもタダオ殿が持つておる方がふさわしいじゃう」

「……私は?」

「「『』は?』」「」

「だから私ならどうなのよ?」

「「『』…………』」「」

四人が四人とも答えに困っていた。

何故ならレイコに渡すと“何故か”明日には道具屋の陳列棚に飾つてある光景しか思い浮かばないのだから。

「……いいわよ、タダオにあげればいいじゃない」

別次元の金欲退魔士とは若干違い、年相応の素直さも持つていてるレイコ。

意外に大人しく引っ込んだらしい。

「じゃあ、ワシはそろそろ行くとしよう。王様、それに王妃様、色々とすみませんでした。タダオ殿にレイコ殿もお元氣で、

『うむ、今度こそ道を誤らない様にな』

『新たな道を進み始めた貴方に神の御加護があらん事を』

『今度悪さしたら何処までも追いかけて行くからね』

「ははは…肝に銘じておきますじや』

「じいちゃんも元氣でな』

「タダオ殿、ワシの知は「マーリン」と申します。何時か再び出会えた時、貴方のお力になれる様に頑張りますじや』

歩き出した親分ゴーストに手を振りながら別れを告げるタダオ。

そんなタダオを振り返りながら彼は眩しいモノを見る様な目で自分の本当の名を告げ、マーリンは笑顔で手を振りながら朝焼けの中に旅立つて行つた。

「とにかく、これで約束のオバケ退治は終了ね。これで猫ちゃんも……

そこまで言つたと思つたらレイコの顔は段々と青くなつて行き、ダラダラと汗も滝の様に流れて來た。

「ど、どひしたんやレイコ姉ちゃん？」

「あ、あはは、あははは……、どうしようタダオー？　もう朝よ、ママやパパスおじ様達も起きている時間よ

「しもうたーーっ！　すっかりわすれとつたーーっ！！」

レイコがそこまで言つとタダオもようやく理解出来た様で同じ様に青くなり、汗を流しまくる。

『これを使いなさい』

そんな一人にレヌール王が両手を差し出したと思つたら、その手の中には光と共に“キメラの翼”が現れた。

『アルカバの町の教会には私達がお告げと言つ形で今回の事を伝えおきます。少しは怒られるかもしれませんがそれ程酷く責められる事は無いでしょ？』

「ありがとうございます王妃様！！」

「かんしゃかんげき兩あられやーー！」

二人は王妃に抱き着いて涙ながらに感謝をする。

王と王妃もそんな二人の頭を『いいんですよ、助けられたのは私達なのですから』と愛おしそうに撫でながら笑顔で告げる。

「王様——、王妃様——、ゆつくりと休んでね——」

「王わまに王妃さま——、バイバイ——、おやすみなさいや——」

タダオとレイは王と王妃に別れを言いながらキメラの翼を使い、  
飛び去つて行く。

王と王妃もそんな二人を見送りながら朝の日差しの中に消えて行く。

アルカパへと飛んで行く一人がふと振り返つて見ると、暗雲に包まれていたレヌール城はその戒めから解き放たれ、その白亜の姿を取り戻していた。

さて、アルカパに戻った二人だが、王妃の言つ通りレヌール城が二人の活躍により解放された事は村中に知れ渡つていて、町の入口にはマミヤとダンカン、そしてパパスが一人の帰りを待つていた。

その足元には例のいじめっ子兄弟が頭に大きめのタンゴブを着けて正座をさせられていた。

どうやらこの騒動の大元が彼等だと言う事がばれ、キツイお仕置きを受けた様だ。

その傍に居た猫はタダオの姿を見つけると「コン、コーンンッ！」と駆け寄つて飛び付くとタダオの顔を舐めまくる。

「わははははー！こり、くすぐったいやないか

「コンコンコーンン！」

一連の騒動がようやく落ち着き、タダオ達もダンカンの宿屋へと戻つている。

約束通り、キラーフォックス猫はタダオ達に渡され今はタダオの膝の上で丸くなつている。

「良かつたわね、猫ちゃん。さつく名前を付けてあげなきやね。えーと、ゲレゲレは「グルルルル」：嫌みたいね。じゃあ、意外な所でシロとか「シャアアアアアーーーーッ！！」な、何よ？そんなに嫌がらなくてもいいじゃない

レイコが色々と名前の候補を上げるがどれも気に入らないらしく中

「ああ、おまえの心配は杞憂だ。おまえの腕の中で、『ロロロロ』と甘えて玉の様に丸くなる。」

そんな彼女を見て思い付いたのか、タダオが「タマモはどうや?」  
い名前やろ」と、言つと彼女も気に入つたらしく更にじやれまくる。

「さてと、名前も決まった事だしそろそろ」「

パパスはそう言いながら徐にタダオを抱え上げると膝の上にうつ伏せにさせ、レイコもまた、同じ様にマリヤの布座の上に乗せられていく。

「父さん？」

膝の上に乗せられた一人はこれから何をされるのか薄々感づいた様で青い顔をしていた。

「お前達のした事は確かに立派だ。……だがしかしつ一夜中に勝手に抜け出し私達に心配かけた事も事実だ。よつて」

そこまで言つとパパスとマミヤは自分の子供達のパンツを捲り、お

尻を剥き出しへある。

「ちよ、ちよっとママ、何をするの? やめてーー、お尻がタダオに丸見えじゃない!!」

「父ちやーーん、それだけはカンベンや、せめてゲンコツにしてくれやーーつーー!」

「二人共いい加減に覚悟を決めなさい」

「其処まで嫌がるからこそ罰になるのだ」

そして、振り上げられたその手は……

「えへへん、ゴメンなさいママーー!」

「かんにんやへへ、かんにんやへへ!」

アルカパの町にパーん、パーんとお尻を叩く音が暫く響いていたとか。

ついでにいじめっ子兄弟の家からも

|| 冒険の書に記録します ||

オマケ

食堂での戦闘が終つた後、レイコは魔物達を倒した場所を回りながら宝石を回収して行く。

「ひー、ふー、みー、ヒ。まとめて255Gつあるんだよ」

卷之三

「どうしたの、タダオ？」

「いや、何やみよーに心の中に引っかかる金額やなあと思ってな」

そんな事を言うタダオの目は何処か遠い所を眺めていた感じだったとか。

「なあ、父ちゃん」「ん、何だタダオ？」

赤くなつたお尻を擦りながらパンツを穿くタダオはパパスに気に入る事を聞いてみた。

「その顔の引っかき傷はどうしたんや?」「ああ、これか。……どうやら名前が氣に入らなかつた様でな。ははは……」「??」

《次回予告》

サンタローズに帰つて來たワイラやけど相も変わらず寒いまや。そんなんある日村で変なイタズラがあちらこちらで起こるんや。そして出会つた女の子、妖精?春を呼ぶ?勇者を捜してゐる?よつしゃ!ワイに任せんかい!

次回「level5「来ない春、イタズラ妖精はメンマがお好き」

でも、お尻ベンベンはむかひカンベンやで。

(・・・) と言つてアルカパレヌール城編終了です。

親分ゴーストは最初はあのまま魔界に帰つてジャハンナで人間になつての再会を考えていたんですが途中から「このキャラ、勿体ないな」と後のマーリンへとフラグを立てました。

そしてタマモが正式に仲間に、擬人化? 当然しますとも、ただし当分先になりますけどね。

次回予告にある様にベラ役は恋姫の「星」にしました。  
盗み食いされる物を試しにメンマに変えてみたりビビッ...と来たもので。

パパスさんはいい加減、諦めましょう。

(・・)ノシ ではまた次回。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2139y/>

ドラゴンクエスト?～紡がれし三つの刻（とき）～

2011年11月27日13時51分発行